

氏名	蔡 宜静 ^{サイ キセイ}
学位	博士(文学)
学位記番号	新大院博(文)第26号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
博士論文名	日本近代文学と映画(活動写真)の比較研究
論文審査委員	主査 教授 先田 進 副査 教授 佐々木 充 副査 教授 井山 弘幸

博士論文の要旨

本論文は、主として大正期に輸入され、急激に日本中に普及した映画(活動写真)が同時代の詩人・小説家の文学観及び文学テキストにどのような影響を及ぼしたかについて、歴大な量の資料を博搜、精査しながらその解明を試みたものである。その概要は以下の通りである。

第一章は「日本近代文学と初期映画(活動写真)」と題し、明治後期・大正期における日本の映画受容について明らかにしようとしたものである。はじめて活動写真に接した知識人たちが受けた衝撃、トーキー映画輸入の波紋、さらには文学理論と映画理論の交流等に論及しながら、当時の劇作家や小説家が映画から被った影響の実態を資料に基づき実証的に浮き彫りにした。

第二章は「萩原朔太郎と活動写真」と題し、朔太郎の映画受容の実態を明らかにした上で、それが彼の詩作にどのような影響を及ぼしたかについて、とりわけ彼の映画観と詩法との間にどのような相関関係が認められるかについて考察したものである。その結果、朔太郎の詩テキストには撮影技法を参照したと思しき痕跡が認められること、〈光り〉・〈影〉・〈リズム〉に関する映像理論を詩作に導入しようとしたことが判明し、これまでの朔太郎詩解釈に疑義を呈した。

第三章は「谷崎潤一郎と活動写真」と題し、大正時代の一時期に小説制作を中断し、もっぱら映画界で活動した谷崎の映画観及びそれが小説制作に及ぼした影響について、当時の代表作『痴人の愛』を具体的に分析、検討することで明らかにしようとしたものである。その結果、『痴人の愛』が映画のシナリオ制作法を取り入れながら構成されているとの結論を導き出した。

第四章は「芥川龍之介と活動写真」と題し、芥川の映画への関心の真相、シナリオ制作を試みたことの動機等を明らかにしようとしたものである。こうした考察を経た上で、晩年に谷崎との間で交わされた《小説の筋》をめぐる論争等に論及し、晩年の芥川の小説観には、朔太郎の映画理論に影響されたシナリオ制作の手法への関心が反映しているのではないかと結論づけた。

終章では、以上四章での考察を踏まえ、今後の検討課題として、大正末期から昭和初期にわたって展開された新興芸術運動との関連、ことに前衛映画に文学者が示した関心の実態について検討することの重要性が述べられている。

審査結果の要旨

蔡宜静氏の学位論文『日本近代文学と初期映画（活動写真）』で検討・考察の対象となったのは、明治後半期に日本に紹介された映画という新しい文化が当時の文学にどのように影響し、それがどのように文芸テキストを左右したかということである。映画・文学両ジャンルに跨ったテーマを取り上げた研究は、これまで全くないわけではないが、文学と映画とはそもそも別ジャンルに属するということから、従来さほど重要視されてこなかったと言わざるをえない。

第一章で、氏は日本ではじめてキネトスコープが上映された明治29年に始まる日本の映画史について再検討を試みた。特に文学者たちが映画から受けた衝撃がどのようなものであったか、それが彼らの文学活動にどのように影響したかについて、多くの資料を活用しながら詳細に論じている。具体的には、小山内薫、谷崎潤一郎、生田長江、馬場孤蝶、萩原朔太郎、室生犀星、芥川龍之介、川端康成等の貴重な映画体験に関する発言を蒐集し、はじめて映画に直面した彼らが受けた衝撃の大きさを克明に描き出し得たと言える。こうした作業により、氏は、映画との出会いが、それまでイメージの創出やその展開を言語表現でおこなっていた小説家・劇作家・詩人たちの文学観を根底から揺り動かす大事件であったことを明らかにした。

第二～四章では、映画の影響が文学活動に顕著に投影した詩人・小説家を取り上げているが、特に従来の先行研究に新しい知見を添加しえたと見なしうるのは、朔太郎を取り上げた第二章と芥川を取り上げた第四章である。朔太郎の詩集『月に吠える』、『青猫』収録詩篇中に頻出する超現実的なイメージについて、従来は詩人の伝記的事項に還元したり、精神病理的な観点から解釈したりする傾向があったが、氏はむしろ詩人の映画体験が投影した結果ではないかと説き、詩人の映像論と詩テキストとを交互に検討し、両者の間に明瞭な相関性が認められることを指摘した。これは従来の朔太郎詩解釈に変更を迫ったものとして高く評価できる。

芥川と映画との関係については、従来さほど重要な研究課題とされてこなかったが、氏は有名な谷崎との小説の筋をめぐる論争の真相を解明する上で、芥川の映画観、とりわけ彼のシナリオ観に対する考察は不可欠であると説き、晩年のシナリオ制作への関心が朔太郎の映画観の影響を受けていること、映画のコンティニュイティに興味を抱いていたことなどを明らかにした。氏によると、芥川の唱えた「詩的精神」を正確に理解するためには、従来のように文学的なコンテクストだけに囚われるのではなく、論争当時シナリオ制作に専念していたことをもっと重視すべきであるということになるが、これも晩年の芥川研究に一石を投じたこととして注目に値する。

本論文を完成させるために氏が閲した資料・文献の類は厩大な量に上るが、持ち前の旺盛な知的好奇心とエネルギーで、それらを十分に活用し、本論文を完成しえたと評しうる。留学生ゆえに、論述面で曖昧な措辞も若干見受けられたが、それも本論文で呈示しえた新しい視点、知見、解釈からすると、瑕瑾とすら言えないだろう。

以上の審査の結果、氏が映画受容に注目しつつ、大正文学史や朔太郎詩及び晩年の芥川をめぐる通説に変更を迫るといふ成果を挙げ得たことに鑑み、本論文は博士（文学）の水準に十分達していると判断した。